

「白布に祈る」

— 2 稿 —

2026/9/28

雨森 れに

〈人物表〉

鹿俣 かまた

しほり

（21）大学4年生

森谷 もりや

アイシャ

（42）パキスタン人。ムスリム。沙羅の母

森谷

清美 きよみ

（70）沙羅の祖母

森谷

啓樹 はるき

（45）沙羅の父

森谷

沙羅 さら

（享年21）大学4年生。しほりの恋人

1. 大学・カフェテリア（昼）

窓が大きくて明るい室内。生徒がまばらにいる。

褐色肌の森谷沙羅（21）、パキスタンの旅行ガイドブックを眺めている。

鹿俣しほり（21）、アイスコーヒーを二人分置く。

沙羅 「パキスタンってコーヒーよりチャイなんだって」

と、ガイドブックを指さす。

しほり 「国が違えばいろいろ違うんでしょ」

沙羅 「出た。しほりの柔軟性」

しほり 「沙羅も偏見ないじゃん」

沙羅 「世の中偏見ばっかよ」

と、顔の前で手を合わせ、祈りの仕草。

しほり 「それは私も」

しほり、沙羅の手を取る。

しほり 「ウチからしく、一緒にいよ」

沙羅、握り返す。

沙羅 「ね、いつにしようか」

沙羅、笑顔。首には金のネックレスが光る。

2. 森谷家・二階・アイシャの部屋（夜）

薄暗い和室。

パキスタンの小物や調度品が置かれている。

礼拝マットの上で森谷アイシャ（42）が礼拝中。

アイシャ 「ビスミッラー・ヒッラフマー・ニッラヒーム」

T 「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」

3. 森谷家・仏間（夜）

仏壇の前に棺。祭壇には沙羅の遺影。

しほり、遺影を見つめる。硬い表情。

沙羅の祖母・森谷清美（70）、座布団を出す。

清美 「どうぞ」

しほり 「あの、沙羅さんはムスリムでしたよね？ 最期もそうするのばかり……」

清美 「イスラム教でなんてやりません。うちは浄土宗ですよ」

と、棺の小窓に視線を向ける。
沙羅の安らかな顔。

天井がミシッと音を立てる。

二階からアラビア語の祈り。

しほり、上を見る。

しほり「お母様が？」

清美、頷く。

しほり「沙羅も、やってみましたよね」

清美、嫌そうな顔。

清美「母親はあんなだし、父親は出張で帰ってこない」

と、大きなため息。

清美「この子は。沙羅は、本当に可哀想な子ですよ」

天井がまた音を立てる。

ふたり、上を見る。

しほり「あの。不躰なお願いかもしれないんですが」

清美「なんですか？」

しほり「沙羅さんのもの、何かいただけないでしょうか」

清美「……二階に、沙羅の部屋があります」

清美、立ち上がる。

4.

森谷家・沙羅の部屋（夜）

整えられた部屋。

窓辺にアクセサリケース。

しほり、アクセサリケースを開ける。

窓の外、森谷啓樹（45）が布団を運んでいる。

啓樹と目が合う。

しほり、軽く会釈。

清美、気づかず。

部屋を懐かしそうに眺めている。

しほり、視線をケースに戻す。

金のチェーンネックレスを見つけ、手に取る。

しほり「これ」

清美「あの子のお気に入りね」

しほり「棺に入れないんですか？」

清美 「葬儀屋さんからだめだって」

清美、悲し気に微笑む。

しほり 「……大切にします」

と、ネックレスをつける。

5. 森谷家・仏間（夜）

しほりと清美が戻る。

アイシャ、棺を守るように座っている。

清美 「ようやく降りてきた！ あなたって人は！」

清美、棺に近づく。

その足が止まる。

棺の蓋が開いている。

清美 「どこへやったの……？」

しほり、棺を覗き込む。

沙羅がない。

6. 森谷家・玄関・外（夜）

しほり、玄関から出てくる。

家の中から、清美の泣き声。

しほり、ゆっくりと玄関の戸を閉める。

そのまま歩き出す。

7. 道（夜）

しほり、森谷家から離れていく。

少しずつ歩く速度を上げる。

数メートル先に、一台のバン。

8. 車・車内（夜）

しほり、助手席に乗り込む。

啓樹 「お疲れ様」

しほり 「啓樹さんも、お疲れ様です」

啓樹、車を発進させる。

しほり、後部座席を見る。

フラットにされた座席。布団に包まれた沙羅。

前を向き、ネックレスに触れる。

啓樹 「それ、沙羅が高校卒業するときに買ってあげたやつだ」

しほり 「えっ、あの、すみません。お返しします」

啓樹 「いいの、いいの。しほりちゃんが使ってたよ」

しほり、複雑そうに、

しほり 「……いいんですね」

啓樹 「沙羅も同じ気持ちだと思うよ」

9. しほりの家・室内（夜）

マンションの一室。

玄関には脱ぎ散らかされたしほりと啓樹の靴。

室内にはパキスタンの小物がちらほら。

風呂場から、

しほりの声 「こっちです。浴槽にそのまま……」

啓樹の声 「おっと……よし、いいぞ」

10. しほりの家・風呂場（夜）

空の湯船に服を着たままの沙羅。

啓樹、沙羅の頭を撫でる。

啓樹 「大きくなったなあ……」

インターホンの音。

啓樹、沙羅の頭から手を離す。

啓樹 「僕が行くよ」

と、風呂場を出ていく。

しほり、沙羅の手を取る。

しほり 「らしく、やるね」

首のネックレスが光る。

ノック音。

アイシャ、入ってくる。

アイシャ 「しほり、ありがとう」

しほり 「おばあ様は？」

アイシャ 「話してきた。だいじょうぶ」

アイシャの頬は赤く腫れている。

アイシャ 「グスル、大変だけど、ごめんね」

しほり「沙羅が、そうしたかったと思うんで」
アイシャ「きつと、喜ぶね」

アイシャ、沙羅の服を脱がせていく。
シャワーの音。

しほり、水を張った洗面器に乾燥させたシドルの葉
を揉み入れる。

アイシャ、その水で沙羅を清めていく。

しほり、必要なものを手渡していく。

ふたりの額に汗。

11. しほりの家・室内（夜）

シーツのような白い布が広げてある。

啓樹、タオルで巻かれた沙羅を運んでくる。

白布の上に、沙羅を寝かせる。

啓樹、沙羅を見ないように離れる。

アイシャ、沙羅を包み始める。

沙羅の体が見えなくなっていく。

しほり、手伝いながらも、沙羅を見つめる。

× × ×

アイシャ「できた」

沙羅の体は白い布の塊になっている。

しほり「……ムスリムは、死んだらどうなるんですか？」

アイシャ「アッラーの元に帰る」

しほり「アイシャさんなら、また会えますか？」

アイシャ、微笑む。

12. 車・車内（早朝）

しほり、バンを運転している。

後部座席には白布に包まれた沙羅。

その両脇にアイシャと啓樹。

13. 道（早朝）

森谷家前の道。

バンが停まる。

アイシヤと啓樹、降りる。

啓樹、玄関へ。

アイシヤ、バンのバックドアを開ける。

清美、啓樹に連れられて出てくる。

しほりへ深い礼。

アイシヤ、清美の元へ。

清美を抱きしめる。

啓樹、ふたりの背中を撫でる。

14. 車・車内（早朝）

しほり、ネックレスを触る。

バックミラー越しに後部座席を見る。

× × ×

沙羅 「ね、いつにしようか」

沙羅の笑顔。

握り合う手。

× × ×

後部座席にあるのは、白布に包まれた沙羅。

しほり、前を向く。

ネックレスを握る。

15. 空（昼）

青空に飛行機雲。

（おわり）